

馬場貞由訳「遁花秘訣」 写本一六種の書誌学的検討

日本医史学雑誌第五十二巻第四号 平成十八年 六月六日受理
平成十八年十二月二十日発行 平成十八年十一月二日受理

松木明知

弘前大学医学部麻醉科学教室

〔要旨〕エトロフ島の幕府会所番人であった中川五郎次は一八〇七年にロシア船に拉致され、シベリアに連行されたが、五年間の苦勞の末、帰国を許された。その際二冊のロシア語の種痘書を持参した。その内の一冊を偶々松前に出張中の幕府訳官馬場貞由は関心を示して数ヶ月で翻訳した。訳が不満足であったので、馬場は一八二〇年に改訳して「遁花秘訣」と題した。しかし草稿は出版されずに写本として伝えられた。後に利光仙庵は長崎で一写本を入手し「魯西亞牛痘全書」として出版した。

現在、一六種の「遁花秘訣」の写本が現存するが、内容、ロシア語題名のカタカナ表記、図の有無、訳文などを比較検討すると、「武田本A」が正確さにおいて馬場の原草稿に最も近似していると考えられる。

キーワード——中川五郎次、馬場貞由、遁花秘訣、利光仙庵、魯西亞牛痘全書

はじめに

牛痘種痘法が幕末のわが国における西洋医学の受容と普及に大きな影響を与えたことは、今更贅言を必要としない。

牛痘種痘法⁽²⁾のわが国への渡来ルートの一つであるシベリア經由の方法は一八〇七年（文化四）エトロフ島に來航したロシア船に拉致され、以來シベリアで五年余を過ごし、一八一二年（文化九）に日本に送還された中川五郎次によって齎された。五郎次が彼の地に滞在中入手して持ち帰った二冊のロシア語種痘書の内、一冊は偶然にも松前に幽囚されていたロシア船長ゴロウニンの取調べのため松前に出張中の幕府訳官馬場貞由の眼に留まり、馬場は早速それを筆写して翻訳した。一八一三年（文化一〇）のことであった。しかし翻訳が未熟であると考えた馬場は、最初に書名をロシア語原書に忠実に「痘瘡預防法」と題したが、それを放置し六年後に訳稿を改めて見直して「遁花秘訣」と改題した。しかし草稿は依然としてそのまま放置されて出版されることもなく、数種の写本として後世に伝えられた。

なお「なかがわ」ごろうじは彼が在世中から「中川」五郎治⁽³⁾とも「中川」五郎次とも記されてきた。帰国してから江戸幕府の取調に際して、彼の陳述内容を記した写本にも「五郎治」とも「五郎次」とも記され、にわかには決定し難い。本人自筆の史料は何一つ残されていないが、一八〇七年（文化四）五月一八日、ロシア船ユノナ号の中で彼が認めた手紙の写しに「五郎次」とある。これは彼の名前に關して信拠すべき最も古い史料である。このことから彼自身は当時「五郎次」と記したと思われるので、本稿では従来の「五郎治」ではなく、「五郎次」を採用した。

「遁花秘訣」の一写本を長崎で入手した三河の利光仙庵が「魯西亜牛痘全書」と改題して上梓したのは、馬場が翻

訳の改訂を行った一八二〇年(文政三)から数えて三〇年後の一八五〇年(嘉永三)であった。しかし残念なことには馬場貞由自筆の「遁花秘訣」の訳稿は未だ発見されていない。現在「魯西亞牛痘全書」を除けば一六種の「遁花秘訣」の写本が披見されるが、これらの諸写本の中で、どれが内容的に馬場貞由の訳稿、延いてはロシア語原書に最も近いかを検討したのが本稿である。

一・写本「遁花秘訣」の発掘

幕府の訳官馬場貞由が非常な苦心の末、翻訳した「遁花秘訣」はわが国における最初のロシア語書からの翻訳書であった。しかしこの馬場の不滅の業績は、長い間一部の研究者以外には知られることはなかった。例えば勝俣銓吉郎は「遁花秘訣」に言及しているが、「遁花秘訣」の写本を實現したのではなく、安政二年版の「魯西亞牛痘全書」中の馬場の序文を参考にして紹介したものであった。また伊吹山一草亭は馬場について記述した論文の中で東京都杉並区宗延寺にある馬場の墓碑銘を参考にして彼の著訳書を示しているが、その中に「遁花秘訣」は欠落している。墓碑銘に刻されていないからであろう。国語学者杉本つとむは一九六〇年代から馬場貞由について詳細な研究を始めた。一九六七年(昭和四二)杉本は「近代日本語の研究」のなかで馬場貞由の事績を論じ、静嘉堂文庫の嘉永三年版の「魯西亞牛痘全書」を紹介して、これがわが国最初のロシア語書の翻訳であるとしている。前述したように「魯西亞牛痘全書」は三河の医師利光仙庵が長崎で「遁花秘訣」の一写本を得て、それを改題出版したものであった。次いで杉本は一九七一年(昭和四六)に「遁花秘訣」とその翻訳(一)——わが国最初のロシア書の翻訳——と題する論文を発表したが、「遁花秘訣」の写本、「国会本」と東北大学の「狩野本」(本書で以下に論ずる「狩野本A」)を対象にした研究であった。その後も杉本は精力的に馬場の業績について研究し、一九八二年(昭和五七)には馬場の「遁花秘訣」研究の総括ともいべき論考を発表した。東北大学図書館蔵の「狩野本」二種、「国会本」、京都

大学図書館蔵の「富士川本」などを参考に「遁花秘訣」の全文を活字化している。しかし杉本はここで決定的な誤りを犯した。馬場が翻訳した「遁花秘訣」のロシア語原書は英国のエドワード・ジェンナーが一七九八年（寛政一〇）に出版したいわゆる「牛痘の原因および効果に関する研究」のロシア語訳であると誤解したことである。「遁花秘訣」のロシア語原書はジェンナーの著書とは全く関係がない。さらに杉本は利光仙庵によって翻刻された「魯西亜牛痘全書」には嘉永三年版が存在することを静嘉堂文庫本によって以前に発表しながら、この最終的な論考においては嘉永三年版の存在を否定している。また最近の著書においても依然としてこれらの重大な誤りは何ら改められずに踏襲されている。このように「遁花秘訣」に関する杉本の一連の研究にはその基本において多くの重大な誤りが認められているので、無視して構わないと考えられる。以上の杉本の誤謬については拙稿で指摘した。さらに杉本は次に述べる諸研究者の研究を正当に評価しておらず、杉本は決して本人が主張するような「遁花秘訣」の先駆的研究者とは云えない。

一方、医学史研究者は早くから「遁花秘訣」に注目した。しかしそれは明治期、大正期のことではなく、昭和時代に入ってからのことであった。長崎医科大学皮膚科の高橋信吉教授は一九三四年（昭和九）に市立函館図書館で「遁花秘訣」の写本「函館本」を閲覧し、これが「魯西亜牛痘全書」の「原本」であることを確認した。ただし利光仙庵旧蔵の写本であるとは記していない。そして「函館本」と「魯西亜牛痘全書」中の馬場貞由による序文全文を引用して比較した。⁽¹⁸⁾阿部龍夫は一九四三年（昭和一八）に上梓した「中川五郎治と種痘伝来」の中で「函館本」を写真で示し簡単に言及しているが、「函館本」と「魯西亜牛痘全書」に見られる内容の違いなどについては何も指摘していない。高橋信吉、阿部龍夫の両者は「函館本」以外の「遁花秘訣」の写本を見出そうという考えは全くなかったと思われる。当時文献検索が大変困難を極めたことを考慮すると無理もなかったと思う。

言語学者村山七郎は馬場貞由のロシア語研究に注目し、これに関連して「遁花秘訣」のロシア語原書、つまり一八

○三年発行のペテルブルグ版をモスクワのレーニン図書館で発見した。そのマイクロフィルムを入手して日本語に翻訳して一九六五年(昭和四〇)に発表した。一九六八年(昭和四三)に順天堂大学医史学研究室の小川鼎三と酒井シヅは村山の日本語訳を基本に「魯西亜牛痘全書」、「遁花秘訣」の写本二種(「函館本」、「長谷川本」)の比較検討を行った。そして小川らは一九七二年(昭和四七)岩波書店の「日本思想大系 六五」「洋学 下」において「函館本」を活字覆刻して解説と注釈を付けた。この中で小川らは「函館本」以外に「狩野本」、「武田本(A、B、D)」、「富士川本」、「安井本」を比較検討しており、これらの写本は「函館本」と「富士川本」(「函館本」以外のすべて)の二系統に分類され、「函館本」が馬場の原草稿により近いとして「函館本」を覆刻した。しかし小川らは二系統に分類した明確な根拠を示しておらず、また付図の解釈など多くの重要な点を見落としており、その結論は正しくない。

著者も津軽地方の疫史、日本種痘史に関連して一九六二年(昭和三七)から中川五郎次の研究を開始した。この翌年に「遁花秘訣」のロシア語原書のモスクワ版(一八〇五年)をマイクロフィルムの形で入手した。しかし当時は医学部卒業試験、インターン実習、医師国家試験と多忙を極めたため研究を一時中断せざるを得なかったが、四年後研究を再開した。五郎次に関連して「魯西亜牛痘全書」と当時までに入手出来た数種の「遁花秘訣」の写本についての書誌学的研究を発表した。馬場貞由自筆の草稿の所在が知られていないので、可能な限り多くの写本を集めて比較検討する必要があると考えたからであった。以来、鋭意努力して前述の写本に加えてこれまで合計一六種の写本を入手した。詳細は次節以下に述べるが、「魯西亜牛痘全書」の発行年、「遁花秘訣」写本間の異同等について多くの新見が得られている。

以上を纏めると、「遁花秘訣」の真の発掘者は長崎で一写本を得て一八五〇年(嘉永三)に「魯西亜牛痘全書」として改題して覆刻した医師利光仙庵と一八〇三年発行のペテルブルグ版のロシア語原書をモスクワで発見して現代

日本語に翻訳した村山七郎であろう。

二・馬場貞由による「遁花秘訣」翻訳の経緯

馬場貞由がどうして「遁花秘訣」を翻訳するようになったかは全くの奇縁である。これについては馬場貞由自身が「遁花秘訣」の「序」の中で述べているので、本人に語って貰うのが最適である。一六種の写本のうち、ロシア原書の題名を最も正しく伝えている「武田本B」から馬場の「序」を左に示す。しかし著者は武田本B全体が馬場自身の草稿やロシア語原書に最も近似していると主張するものではない。ロシア原書のカタカナ表記だけに限定すればという条件での話である。前節で述べたように小川鼎三らは「函館本」を最上の写本としたが、誤字も含めた文章の正確さにおいては「武田本B」が「函館本」に勝ると思う。

両写本で異なっている箇所については（ ）内に「函館本」の記述を示した。なおこの「武田本B」の序文は「武田本A」の末尾に付随しているが、筆跡の点から「序」の欠落している「武田本B」の序であることは間違いない。詳細は後述する。句読点は著者による。なお異体字「ㄣ」は当用漢字の「事」に直した。

凡例（序）

此編ハ魯西亜ノ皇都「ペテルブルグ」（ヘテルブルグ）ナル医学館ニ於テ、彼一千八百三年

日本享和三年癸亥

帝王ノ

命ニ因テ板行セル書ナリ。題名ヲ「スボソツプ。イズバール^井ツシヤ。ソウエルセンノ。ヲツ。ラスペンノイ。ザラゼ」（スボツ。イズバールウイツシヤ。ソウエルセンノ。ヲツ。ラス。ヘンノイ。ザラゼ）ト云フ。是ヲ訳スレハ、痘瘡ノ流行ヲ預防スル真法トイヘル義ナリ。故ニ訳成テ（訳成ヲ）後、私ニ是ヲ遁花秘訣ト名ク（名ツク）。

今ヲ去ル事既二十八九年前、予嘗テ長崎ニ在ル時、前ノ甲必丹「ヘンデレキ。ドーフ(ドー)」予ニ語テ曰、頃入津ノ我和蘭船ヨリ持来レル我国ノ風説書ヲ見ルニ、近来牛痘ヲ取テ人ニ種ルニ、其功人痘ニ勝ル事拔群ナル由アリト。予思フニ、遠カラスシテ其法ヲ記シタル書冊舶来アルベシト。乃是ヲ待ツ事数年ナリ。既ニ文化五年戊辰(戊辰)ノ春、予長崎ヲ出ルノ頃迄ハ、此書来ラス。今猶、其書ノ舶来アル事ヲ聞カス。然ルニ、予嘗テ文化十年癸酉ノ春、命ヲ奉シテ(テ欠落)松前ニ到リ、彼地ニ在留スル魯西亜人ニ就テ彼方言ヲ学フ。一日、村上某一小冊ヲ魯西亜人ノ寓居ニ携ヘ(携エ)来リ、是ハ松前ノ土民五郎治トイヘル者「ヲホーツク」ニ於テ得来レル書ニテ、牛痘ヲ人ニ種ユル法ヲ記シタル物ナリト云ヘリ。故ニ、予拳ヲ打テ、既ニ数年前(前欠落)長崎ニテ伝聞セシ事ノ、今此遠隔ナル松前ニ於テ、再ヒ其事ヲ聞キ、加之魯西亜語ニテ記セル物ヲ見ル事ノ奇会、実ニ歎喜ニ堪ヘサ(実ニ歎喜ニ堪タ)レハ、忽是ヲ村上某ニ請テ旅舎ニ携ヘ歸ヘレリ(携歸リ)謄写速ニ終リ、日々はヲ魯西亜人ノ寓居ニ携ヘ(ヘ欠落)行テ、其文意ヲ「モウル」ニ問フ。然ルニ其頃ハ、未タ三四月ニ滿タサル浅学ナレハ、彼カ示ス所容易ニ理会スヘカラサレハ、其苦心少カラス。然レ共日ヲ積テ、終ニ全編ノ大略ヲ解シ得タリ。其冬歸府シテ後、早速是ヲ訳セントセシカ、再ヒ考フルニ、編中ノ文意十ノ二三ハ理会セサル所アリ。強テ是ヲ訳サハ、必謬語多カルベシ。日ヲ過テ少モ此語ニ熟シタル後ニ訳サバ(訳サハ)、其誤ル事亦少カラント。コ、ニ於テ、是ヲ其俚ニ捨置シ事既ニ六年ナリ。茲ニ文政元年戊寅ノ夏(文化政元年戊寅ノ夏)、相州浦賀ニ諳厄利亞ノ商船来リシ時、予又命ヲ(ヲ欠落)奉シテ彼船ニ到リ、其始終ヲ深査(探査)セリ。其時、船主一小冊ト痲ノ入りタル硝子瓶及ヒ一片ノ硝子磬(硝子盤)トヲ携ヘ(ヘ欠落)出テ曰。卷尾ニ個此圖ヲ附ス(この割注欠落)此瓶ニ納リタルハ牛痘ノ痲ナリ。硝子磬(硝子盤)ハ此痲ヲ磨リヲロス器ナリ。又此一冊ハ牛痘ノ種法ヲ記シタルモノナリ。我外ニ土産ナシ。是ヲ君セント(君セント事)。外ニ紙ニ包タル一塊アリ。是ハ草花ノ種ナル由。此外ニ家野牛アリ。何レモ予ニ(ニ欠落)與(与)ヘント云フ。予辞シテ受サリキ。後熟考フ(熟考ス)ルニ、最初長崎ニテ和蘭人(和蘭人)ヨリ聞キ、後松前ニ於テ魯西亜人ヨリ其書ヲ得、今又相州

ニテ諳厄利亜人其書ト痴トヲ與ヘント云フ。既ニ其事ヲ見聞スル事三度ニ及フ。実ニ奇ト謂ツベシ。コ、ニ於テ又訳稿ヲナサン事ヲ思ヒ企タリ。即今始テ成ル。前ニ魯西亜ノ板本ヲ訳セシ者ナシ。予ヲ以テ最初トス。故ニ誤解謬訳固ヨリ多カルベシ（多カルヘシ）。後ノ君子宜ク訂正セン事ヲ希フノミ。

文政三年庚辰ノ秋

馬場貞由 識

右に示した馬場の「序」を読めば、松前滞在中かその直後に「遁花秘訣」の粗稿が作られたが、馬場はそれが不完全なものであると自覚していたため放置し、六年後に改めて手を入れて一応の訳稿を完成させたことが理解される。後に述べるように現存する写本は、馬場の「序」によって二大別されるが、これは粗稿と改訂稿との存在を示唆しているのかも知れない。このことについては改めて後に論じたい。

三．現存する「遁花秘訣」の諸写本

管見に入った「遁花秘訣」の写本は合計して一六種になる。これらの一部については著者や他の研究者によって研究発表されている。これらの写本を旧蔵者、所蔵者、所属文庫名に因んで略称を付す。例えば函館市中央図書館所蔵の写本を「函館本」、東北大学図書館狩野文庫の写本を「狩野本」と略す。さらに同一施設に複数の写本がある場合にはアルファベットで区別する。「狩野本A」や「狩野本B」である。以上を一括して表1に示した。

「遁花秘訣」の場合、既にロシア語原書が知られている。したがって写本の内容、つまり全体的構成や図の有無

が重要である。書写者の筆跡も重要であることはもちろんであるが、対照とすべき同年代の馬場の筆跡がなく、研究は非常に困難である。したがって以下には主として写本の書誌学的記述に加えてその内容についても記述する。

表1 「魯西亞牛痘全書」、「遁花秘訣」各写本の所在

1	「魯西亞牛痘全書」	……………	自家蔵
2	狩野本A	……………	東北大学図書館蔵(狩野文庫)
3	狩野本B	……………	右に同じ
4	神原本	……………	香川大学図書館蔵(神原文庫)
5	研医学会本	……………	財団法人 研医学会眼科図書館蔵
6	国会本	……………	国立国会図書館蔵
7	小室本	……………	埼玉県立文書館蔵(小室開弘氏寄託)
8	高野本	……………	浦和市 高野キン子氏蔵
9 12	武田本A、D	……………	財団法人 武田科学振興財団 杏雨書屋蔵
13	田中本	……………	萩市 田中助一氏蔵
14	函館本	……………	市立函館図書館(平成一七年一月からは函館市中央図書館)蔵
15	長谷川本	……………	東京都世田谷区 道家達将氏蔵

- 16 富士川本 京都大学図書館蔵(富士川文庫)
 17 安井本 愛知県吉良町 安井 広氏蔵

(注) 個人所蔵者については、著者が実見し、複写などを入手した一九七五年(昭和五〇)当時の所蔵者である。現在の所蔵者は必ずしも明らかでない写本もある。

(1) 魯西亞牛痘全書(嘉永三年版)

三河の医師利光仙庵によつて一八五〇年(嘉永三)に覆刻された「魯西亞牛痘全書」はもちろん写本ではない。しかし仙庵が一八二五年(天保末年)頃長崎で「遁花秘訣」の一写本を入手して覆刻したものである。しかし仙庵が用いたと思われる親本は現存しない。「遁花秘訣」についてのこれまでの研究は、いずれもこの「魯西亞牛痘全書」と比較検討を行っている。このような意味において、まず「魯西亞牛痘全書」を最初に示してその内容を詳細に述べたい。

「魯西亞牛痘全書」は上下二卷である。題箋には「乾」、「坤」とあるが、本文には「卷之上」、「卷之下」とある。「卷之上」の冒頭は朝川同斎の書で「春秋觀華」とある。「秋」と「華」は古字を用いている。次に利光仙庵による「魯西亞牛痘全書序」が記されているが、生方鼎斎の書である。次に利光仙庵の「魯西亞牛痘全書凡例」がある。次も「魯西亞牛痘全書凡例」であるが、これは馬場貞由の「序」である。この中で仙庵は注釈して、彼が長崎で入手した「遁花秘訣」の写本には卷末の図が欠落していたと述べている。左に上下二卷に分けて目次を示しておく。他の写本の内容と比較するために便宜上、章の下にアルファベットを付しておく。

「卷之上」

献辞 (朝川同齋書)

魯西亞牛痘全書序 (利光仙庵による、生方鼎齋の書)

魯西亞牛痘全書凡例 (利光仙庵による)

魯西亞牛痘全書凡例 (馬場貞由による) A

原序 B

魯西亞牛痘全書目次 C

牛痘ノ裨益及ヒ秀勝ノ弁 D

「卷之下」

牛痘ノ種法ヲ拒ミ誹謗スルノ弁 E

牝牛痘瘡ノ真仮ヲ分別スル法 F

牛痘ヲ種テ発スル諸症 G

牛痘ノ能力 H

牛痘ノ種法 I

牛痘漿ヲ取用スル時期 J

牛痘漿ヲ貯ル法 K

牛痘功ヲ奏シテ発スル諸症ノ順次 L

牛痘ヲ種テ発シタル痘ノ真仮ヲ見分ツ法 M

魯西亞牛痘全書附録 (利光仙庵による)

「卷之上」の「魯西亞牛痘全書目次」中の「牛痘ノ種法」は「卷之下」の本文では単に「種法」となっている。同様に「牛痘漿ヲ貯ル法」も本文では「痘漿ヲ貯ル法」となって「牛」の字が欠落している。

巻末にある「魯西亞牛痘全書附録」は仙庵が牛痘種痘法の正しい普及を願って、自分の経験を述べたものである。仙庵の入手した写本が管見に入った十六種の写本の中に含まれているか否かは難しい問題である。というのは仙庵が自分の牛痘種痘の経験を基に写本中の語句を変えているからである。例えば「痘漿」は他のすべての写本では「痘汁」である。もちろん「痘漿」が正確である。現在の知見から仙庵が用いた写本は本論文で論ずる一六種の中に含まれていないと結論しておく。

以下の諸写本と比較研究するため、馬場貞由の序（「魯西亞牛痘全書」では「魯西亞牛痘全書凡例」）以下にアルファベットで記号を付した。因みにロシア語原書の内容をアルファベットで示すと、BDEFGHIJKLMCとなる。もちろん馬場貞由の「序」はない。

各章が「天」、「地」や「上」、「下」などに分かれて記述されている場合は、例えば「原序」ではB₁、B₂、目次の場合はC₁、C₂というように記載した。ロシア語原書と「魯西亞牛痘全書」の内容を表2に一括して示した。

表2 「遁花秘訣」原書と「魯西亞牛痘全書」の目次比較

「遁花秘訣」原書（一八〇三年版）	魯西亞牛痘全書（嘉永三年版）
	魯西亞牛痘全書序（利光の）
	魯西亞牛痘全書凡例（利光の）
	魯西亞牛痘全書凡例（馬場の）
A

序

牛痘の効用と色々な長所について

牛痘接種反対説に対する反駁

牝牛における牛痘について

人間における偶然の牛痘について

痘感染の諸特質について

牛痘接種の最良の方法について

どんな時期に痘物質を取るべきか

痘物質の保存

牛痘の作用の時期と仕方

真性及び仮性接種牛痘の特徴

目次

付図

原序 B

目次 C

牛痘ノ裨益及ヒ秀勝ノ弁 D

牛痘ノ種法ヲ拒ミ誹謗スルノ弁 E

牝牛痘瘡ノ真仮ヲ分別スル法 F

牛痘ヲ種テ発スル諸症 G

牛痘ノ能力 H

牛痘ノ種法 I

牛痘漿ヲ取用スル時期 J

牛痘漿ヲ貯ル法 K

牛痘功ヲ奏シテ発スル諸症ノ順次 L

牛痘ヲ種テ発シタル痘ノ真仮ヲ見分ツ法 M

附録 (利光仙庵の)

(2) 狩野本 A

東北大学附属図書館の狩野文庫には二冊の写本が所蔵されている。狩野文庫の若い番号の写本を「狩野本A」(請求番号 狩9-22869)としておく。書写者、書写年代は不詳。

袋綴。一冊であるが「天」、「地」の二巻に分かれている。縦二四・〇センチメートル、横一六・四センチメートル。製本された表紙には「遁花秘訣」の題箋がある。内題は「遁花秘訣 天ノ巻」と「遁花秘訣 地ノ編」となつ

ているが、「天ノ巻」の末尾には「遁花秘訣天ノ編終」とあつて「巻」と「編」が混同されている。本文は「天ノ巻」一〇丁、「地ノ編」は九丁。毎半丁に無界一四行記されている。一行当りの字数は不定であるが、約三五字である。

「天」の本文は「牛痘ノ種法ヲ拒ミ誹謗スル説ヲ闢ク弁」の途中で終わっている。「天」の末尾にある目次の最後には「人痘ヲ種牛痘ノ如ク難痘ナキ一味製鍊藥品ノ事」、「痘瘡日々変状順次」、「牛痘苗ヲ貯フノ法」と記載されているが、頭注で「本文欠」となつて「地」の巻にはこれらの条がない。目次と本文中の見出しとは異なつており、例えば目次の「痘苗」は本文中の見出しでは「痘汁」となつている。脱字も見られ、凶も欠落している。全体的に「魯西亜牛痘全書」と本文の内容は同じであるが、善写本とは云えない。以上をアルファベットで示すとA C₁ B D E₁ C₂ E₂ F G H I J K L Mとなる。なお前述したようにCはC₁とC₂、EはE₁とE₂に各々が「上巻」や「下巻」、または「乾」や「坤」、あるいは「天」や「地」に分かれて記載されていることを示している。つまりこの写本では、Cの「目次」は一括して示されておらず、C₁（「天」）とC₂（「地」）に分かれて記されている。

(3) 狩野本 B

縦二一・五センチメートル、横一三・七センチメートル。袋綴。一冊。全三四丁。毎半丁に無界一四行が記され、一行約二四字である。題箋を欠く。

第一丁表に「嘉永四年亥四月吉日 観古館におゐて写 遁花秘訣」とあるが、書写者は不詳。第二丁の表と裏に「肆成」の識語が記されているが、前半丁は邱浩川の種痘書、後半丁は上腕の取穴部位について論じたものである。「肆成」は小山肆成のことであろうが、小山自身の書き込みか否かは不明である。末尾にもう一箇所書き入れがあるが、「朔日丸」の処方を示したもので、本書の内容とは全く関係がない。本文において「魯西亜牛痘全書」の「牝牛痘瘡ノ真仮ヲ分別スル法」、「牛痘漿ヲ取用スル時期」、「痘漿ヲ貯ル法」、「牛痘ヲ種テ発シタル痘ノ真仮ヲ見分ツ法」

に相当する四つの章が欠落している。図もない。アルファベットで示すとACBDEGHIである。

(4) 神原本

香川大学図書館所蔵の神原文庫の一本である。神原文庫は香川大学初代学長を勤めた神原甚蔵の寄贈した図書からなる。本写本は袋綴、一冊。縦二三・二センチメートル、横一六・〇センチメートル。三二丁。每半丁に二三行、一行約一九字が、版心に「随分書齋」とある野紙に記されている。題箋には「遁花秘訣」とあるが、本文目次には「痘瘡預防法」とある。書写者、書写年代は不詳。各丁の上に書写者あるいは写本の入手者(必ずしも神原とは限らないと思われる)による朱の頭注があり、本文中の誤字の一部も朱で訂正されている。馬場による「凡例」の干支は正しく「庚辰」と記されているが、目次には「凡例」が欠如しており、原序である「序」の次に「牛痘ヲ種テ発シタル痘ノ真仮ヲ見分ツ法」が来て、本文の順序と異なる。同じく目次には「牛痘ノ種法ヲ拒ミ誹謗スル弁」の下に「種痘日ニ変スルノ状」があるが、本文中には欠落している。目次にある「牛痘汁ヲ貯ヘル法」は本文では「痘汁貼方」と誤っている。「貼」は「貯」の誤記である。全体的には正確な写本とは云えない。図はない。内容はACBDEFGHIJKLMである。

(5) 研医学会本

財団法人研医学会眼科図書館所蔵の写本である。「牛痘論」との合冊である。縦二三・八センチメートル、横一六・四センチメートル。袋綴。一冊、三八丁。馬場の題言が四丁、「天之編」は一八丁、「地之編」は一六丁。每半丁に無界十行、一行に約二〇字が楷書で記されている。書写者、書写年代は不明であるが、紙質の状態から見て比較的新しい書写であることは間違いない。第一丁表に「俊斎秘笈」、「宮崎蔵書」の押印がある。極めてきれいに書写さ

れており一字の訂正もない。内容的に「天」と「地」に別れているが、「天」の末尾の「牛痘ノ種法ヲ拒ミ誹謗スル説ヲ闢ク弁」の一部は「地」の巻の冒頭に収められている。このことから送り仮名など極めて些細な差異はあるものの、本写本は「狩野本A」と同じ系統の写本であることは間違いない。図はない。内容はA C¹ B D E¹ C² E² F G H I J K L Mである。

(6) 国会本

国立国会図書館の桜園叢書二八に「三王外記」と共に収められている。縦二四・〇センチメートル、横一五・五センチメートル。一冊、三八丁。「天之編」、「地之編」に別れており、馬場貞由の題言四丁を含む「天之編」は二二丁、「地之編」は二六丁。每半丁に無界一〇行、一行二〇字が楷書で記されている。表紙に朱で「遁花秘訣原本地編目次中ニ左ノ二項アレ共本文闕失スヨリテ省ク ○人痘ヲ種牛痘ノ如ク難痘ナキ一味製鍊藥品ノ事 ○痘瘡日々変状順次」とある。

本文の構成、その順序、誤字・脱字の状態、例えば馬場の序である「題言」の第一パラグラフ末尾に「故ニ訳成テ私ニ遁花訣ト名ク」とあって「秘」が欠落している点、その外本文中に散見される「本ノマ、」はすべて国会本に一致している点などから、国会本を書写して研医学会本が出来たのである。そして全く同様な理由によって国会本は狩野本Aを書写したものであることも確実である。このことは後述するようにロシア語原書題名のカタカナ表記からも立証される。内容はA C¹ B D E¹ C² E² F G H I J K L Mである。

(7) 小室本

小室元長旧蔵本であり、現在小室家文書の中に「蘭東事始」と一緒に合本されている。縦二三・六センチメートル

ル、横一六・四センチメートル。三〇丁。版心に小室元長の塾名「如達堂」に因んだ「如達堂蔵」の罫紙に元長自身が書写したものである。毎半丁に一〇行、一行当りの字数は不定。書写の年代は不詳。

表紙はないが、第一枚目第一行に「遁花秘訣巻之上」とあり、その下に「小室元長蔵書」と押印されている。構成的に「巻之上」(一八丁)と「巻之下」(二二丁)からなるが、「巻之上」の「原序」に相当する「発凡例言」

の次行と「巻之下」の最初に「東都 馬場貞由 訳」とあるのが特異的であり、他の写本には見られない。一部の章の頭には△印、各パラグラフの頭には○印を付している。構成的には目次を欠き、最終章の「牛痘ヲ種ヘテ発シタル痘ノ真仮ヲ見分ツ法」が二つに分けられて、後半の部分の見出しは「種痘感セサル弁」となっている。

馬場の「題言」を読む限り、翻訳に苦労した馬場の心情が他の写本より吐露されているように思われる。例えば「武田本B」では「コ、ニ於テ、又訳稿ヲナサン事ヲ思ヒ企タリ。即今始テ成ル。前二魯西亜ノ板本ヲ訳セシ者ナシ。予ヲ以テ最初トス。故ニ誤解謬訳固ヨリ多カルベシ。後ノ君子宜ク訂正セン事ヲ希フ。」となっているが、「小室本」では「斯ニ於テ退テ業ヲ起シ、今訳稿始メテ成レリ。嗚呼 皇国魯西亜ノ邦本ヲ訳スル者、実ニ余ヲ以テ嚆矢トス。故ニ誤解謬訳ノ如キハ改ムルト雖共又固ヨリ少ナカラズトス。後ノ君子宜ク訂正セン事を希フノミ」(句読点―松本)となつている。ガラス瓶、ガラス盤の一図以外に接種の二図が付されているが、ロシア原書の図とは全くかけ離れており、しかも極めて稚拙である。この点を考慮するとロシア語原書や馬場の草稿から大分離れたものである。内容はA B D E F G H I J K L M² 図である。

(8) 高野本

浦和市の高野キン子氏の所蔵本である。縦二六・一センチメートル、横一六・〇センチメートル。一冊、三九丁。題箋を欠く。毎半丁毎に無界一〇行、一行は不定であるが約二四字記されている。書写者と書写年代は不詳。

構成的に「上」、「中」、「下」に分かれているのが特徴的であり、これは他の写本には見られない。「上」は「題言」から「牛痘之益及ヒ人痘ニ勝ル弁」まで一四丁、「中」は「牛痘之種法ヲ拒ミ誹謗スル説ヲ開ク弁」から「牛痘之効益」まで一丁、「下」は「種法」から「諸厄利亞船ニ於テ見タル硝子瓶納痲及ヒ硝子盤之図」まで一四丁である。内容的には「魯西亞牛痘全書」のすべてを網羅している。「題言」の末尾で馬場の名前が欠落している。地名の表記で、例えば「ペテルブルグ」を「テルブル」、「ヲホーツカ」を「ラホーツカ」、人名で「ヘンデレキ ドーフ」を「ヘンテレキ トーフ」と記載するなど誤りが多い。図については七日から一六日までの痘疱が描かれている。第二七丁表に右上腕に接種する図があるが、これはロシア語原書にはない。さらに第三九丁の表裏にガラス盤とガラス瓶の図が別々に描かれていることも他の写本と大きく異なる。内容はC₁ A C₂ B D C₃ E F G H C₄ I J K L M 図である。

(9) 武田本 A

財団法人武田科学振興財団の杏雨書屋には四種の写本が所蔵されている。四種の武田本について著者は既に詳しく発表した。その名称についても以前の命名を踏襲する。すなわち写本 A、B、C、D である。

A と B は合本となっており、整理番号は乾六二一〇で、この中に写本 A と写本 B が合冊されている。まず写本 A について略述する。縦二四・〇センチメートル、横一六・七センチメートル。

袋綴。每半丁は無界九行で、一行当り原則として二一字が記されている。「卷上」と「卷下」に分かれており、「卷上」は二八丁、「卷下」は二三丁。製本されているが、その題箋に「遁花秘訣 全」とあり「乾々斎書屋」の蔵書票が貼付されている。表紙には「遁花秘訣 全」とあり、右下に「宇田川稿本」の墨書と「藤浪氏藏」の押印がある。「卷下」の一枚目に「宇田川印記」の押印がある。「宇田川稿本」がだれによって書かれたか分からないが、

「杏雨書屋蔵書目録」は宇田川榕菴による写本とする。しかし彼自身による書写であるか否かはさらなる検討を要すると思う。書写年代は不詳。

この写本の「巻上」の冒頭に次のような記述がある。

長崎	馬場貞由職夫	創訳
江戸	桑田 玄信	
二本松	小此木 懌裕民	訂正
仙台	大槻 茂楨玄幹	校閲

これによれば桑田と小此木の二人が「遁花秘訣」の一写本を入手して、誤りを訂正したことが明白である。そしてこの写本の冒頭にある大槻玄幹の「遁花秘訣引」に「余今此編ノ参閱ニ與ルモ家翁ノ命ニ従ヒ」とあるように、大槻玄幹が父大槻玄澤の意見を参考にして校閲したことになる。いずれも当時の一流の蘭学者たちであったから、彼らが入手した「遁花秘訣」の写本はいい加減なものではなかったと思われる。しかし馬場貞由自身による草稿であったか否かは定かでないが、信頼における写本であったことは想像に難くない。彼らが一種の写本だけでなく、他の写本をも求めたことは、この写本（武田本A）と別の写本（武田本B）が合本されていることによって理解されるであろう。

前述したように桑田、小此木の二人が訂正した原稿を閲覧した大槻玄幹は父の大槻玄澤に相談した。そして玄澤の意見にしたがって構成を大きく変更した。人痘接種などについて記述している部分を後ろの方に移し、牛痘種痘の実際的な記述の部分を前に持ってきた。「魯西亞牛痘全書」の順序で云えば、A C C₁ C₂ B H I J K M 図 D E F G と

した。したがって本写本の構成は他の写本と大きく異なる。理解しやすいように左にその概略を示す。なお「巻下」の末尾に馬場貞由の「凡例」が付されているが、次節で述べるようにこれは誤って綴られたもので、筆跡から次に述べる写本Bの「凡例」であることは間違いない。

遁花秘訣 引 (大槻玄幹による)	A
遁花秘訣 題言 (馬場貞由による)	A
遁花秘訣 目次	A
卷上	C ₁
卷下	C ₂
俄羅斯国官撰遁花秘訣卷上	C ₂
發例要言第一	B
牛痘ノ功益第二	H
種法第三	I
牛痘汁ヲ取り用ル法第四	J
痘汁ヲ貯ル法第五	K
牛痘功ヲ奏メ諸症ヲ発ル順次第六	L
牛痘ヲ種テ発シタル痘ノ真仮ヲ見分ツ法第七	M
俄羅斯国官撰遁花秘訣卷下	M
痘瘡逐日変易形状諸図第八	図

牛痘ノ益及人痘ニ勝ル弁第九	D
牛痘ノ種法ヲ拒ミ誹謗スル説ヲ闢ク弁第十	E
牝牛ノ痘瘡真仮ヲ分別スル法第十一	F
牛痘ヲ種テ発スル諸症第十二	G

このように構成上本書は大きく変えられているが、本文もまた桑田玄信と小此木裕民の二人によって相当手が入られたと考えられる。例えば小室本の項で引用した「武田本B」の馬場の「凡例」の条はこの写本では次のようになっている。

是ニ於テ、嘗テ閣ニ束ヌル所ノ魯西亜文冊子ヲ取テ彼此ニ参考シ、其訳稿ノ繕写、今始テ成リヌ。方今、我東方ニ於テ魯西亜文ノ印本ヲ翻訳スル者ハ、貞由不肖ナリト雖モ、幸ニシテ是ガ嚆矢タリ。是恭ク泰平文化ノ余沢ニ浴スルガ致ス所ナリ。唯恐クハ、余、斯訳学ニ於ル未タ習熟セサルニ出ル所、必ス謬解誤訳亦少カラザル事ヲ得ス。然共、コノ草創、日ヲ重子テ困苦スルヤ、後ノ此学ニ通スルノ君子憐テコレヲ訂正シタマハン事ヲ庶幾フ所ナリ。

一読してこの文章は全く「武田本B」の文とは異なっていることが知られよう。本文も含めた内容は別として、文章自体は手が増えられて正確になった分、馬場の草稿から少し懸隔したと思われる。しかし第八に収められている図は写本中最も正確で原書に近い。大槻玄幹はその「引」の中で「原書ノ如クシ」、「原書ニ対校スル者」と二ヶ所においてロシア語の原書に言及していることからすれば、あるいは玄幹たちの手許に中川五郎次が将来したロシ

ア語の原書があつたのかも知れない。

(10) 武田本 B

写本Aの後半に合冊されている。袋綴。縦二四・〇センチメートル、横一六・七センチメートル。三四丁。每半丁無界九行、一行の字数は不定であるが、原則として二一〜二二字である。書写者と書写年代は不詳。

表紙には大きく「痘瘡予防法」とあるが、墨で棒線が引かれている。その右に小さい字で「遁花秘訣」とあるが、これも棒線が引かれている。両題名に棒線が引かれた理由は必ずしも詳らかでないが、「痘瘡予防法」は最初馬場貞由が原書に忠実に従って付けた題名で、彼が後に訳を見直した際「遁花秘訣」と改めたことを示唆するものと思われる。そうとしても「遁花秘訣」を棒線で消しているのは解せない。

構成的には馬場の序を欠く以外は「魯西亜牛痘全書」と異ならないが、「武田本A」の末尾に付されている三丁半の馬場の序、つまり「凡例」がこの「武田本B」の「凡例」であることは筆跡から明らかである。本文の諸所で右脇に訂正した語句、文章、さらには語句の倒置を示す線が書き込まれている。この写本の旧蔵者が熟読したことを示しているが、必ずしも本写本が馬場自身の手稿であることを示すものではないと思う。

目次「痘瘡予防法目次」と本文中の見出しとは異なっている箇所があり、例えば目次の「序例」は見出しでは「序」、「牛痘汁ヲ取用スル時期」は「牛痘汁ヲ取ル時期」、「牛痘汁ヲ貯ヘル法」は「痘汁ノ貯法」となっており、目次には「種痘日ニ変スルノ状」があるが本文には欠落している。従って図はない。

内容は(A) C B D E F G H I J K L Mである。

(11) 武田本 C

この写本も「乾々齋書屋」の旧蔵本である。

整理番号は乾四八七一。縦二三・六センチメートル、横一六・七センチメートル。袋綴、一冊、一二丁。表紙に「乾々齋書屋」の蔵書票が貼付されている。題箋に「遁花秘訣」とある。毎半丁に無界八行、一行に一六字が記されている。各丁の表の左下に丁数が示されている。書写者と書写年代は不詳。

第一枚目表の初めに「遁花秘訣巻之下 目次」とある。「種法」から「種痘毎日変状之図」までが収められている。「魯西亜牛痘全書」の記号で示すとC、I、J、K、L、M図である。このことから写本Cの「下」は「上、下」の「下」ではなく、「上、中、下」の「下」であることは間違ない。したがって高野本の系統に属し、何かの機会に「下」巻だけが残されたものであろう。この写本で特異的なことは、全文にわたって文章の両脇にルビが付いていることである。しかも右側のルビは音を示し、左側は意訳のルビである。例えば「種法」には右に「シユホウ」、左に「ウシホウソウウヘカタ」、また「種法図解」では右に「シユホウ ツカイ」、左に「ウヘカタノエツ」となっている具合である。もう一つの特徴は各パラグラフの冒頭に○印が付されていることである。図は丁寧に描かれている。ガラス盤とガラス瓶の図は丁の表裏に分けて描かれている。内容はC、I、J、K、L、M図である。

(12) 武田本 D

これも「乾々齋書屋」の旧蔵本である。整理番号は乾四八三四。表紙に「遁花秘訣 全」とある。「乾々齋書屋」の蔵書票が貼付されている。縦二四・三センチメートル、横一六・九センチメートル。袋綴、一冊、一二丁。毎半丁に無界一〇行で、一行当りの字数は不定。

表紙裏に「島藤哲○蔵」(押印のため読めず、押印も不詳)「白川利助」とある。「島藤哲○」が書写者であり、

「白川利助」はその後の所有者と推察されるが、詳細は不明。書写年代も不詳である。第一枚目表に「藤浪氏蔵」の印が押印されている。

二枚目の表と裏に「肆成」の識語が記されている。このことを考慮すれば、この写本は「狩野本B」と同系統であることは間違いない。末尾に「狩野本B」にもある「加魯目羅」の投与量が付記されていることは右の推察を傍証するものである。内容はACBDEGHIJLである。図はない。

(13) 田中本

田中助一氏の所蔵になる写本である。縦二四・〇センチメートル、横一六・二センチメートル。袋綴、仮綴。一冊、三二丁。半丁毎十行の版心に文字のない罫紙に記されており、一行の字数は不定であるが、約二〇字である。

比較的新しい写本と考えられるが、書写者および書写年代の記述はない。表紙に「遁花秘訣 全」とあるが、目次には「痘瘡預防法」とある。この点からすれば神原本、武田本B、これから述べる函館本の系統である。粗末な字で書写されており、特別な書き込みなどもないが、馬場貞由の題言の中で「松前ノ土民五郎次」の「次」を同一人の手で「治」に訂正している。図はない。内容はACBDEFGHIJKLMである。

(14) 函館本

「遁花秘訣」研究で最も早くから知られていた写本である。一九三三年（昭和八）に市立函館図書館（現在は函館市中央図書館）が東京の井上書店から購入した。

縦二四・〇センチメートル、横一六・五センチメートル。袋綴、一冊、四四丁。題箋に「遁花秘訣」とある。三九丁までは版心に文字のない罫紙に毎半丁に一一行、一行一六字で記されている。三九丁の内三八丁までは「遁花

秘訣」であり、第三九丁の表には右上腕の種痘部位の図、象牙の小刀、外科小刀の三図が解説文と共に描かれている。第四〇丁目から四丁半にわたって漢文の「新訂種痘奇法詳悉」が每半丁無界一一行、一行一六字で記されている。書写者および書写年代は不詳。

この写本については第一節で触れたように小川鼎三らが詳しく報告している。目次の条に「痘瘡預防法」とあることから神原本、武田本B、田中本の系統に属すと思われる。内容はABCDEFGHIJKLMである。

(15) 長谷川本

弘前藩の藩士であった長谷川氏が一八五六年(安政三)に書写した写本である。ご子孫である東京工業大学工学部名誉教授長谷川淳氏の旧蔵である。現在、道家達将氏の所蔵である。縦二四・三センチメートル、横一五・一センチメートル。袋綴、仮綴。一九丁、一冊。每半丁に無界一二行、一行に約三一、二字が丁寧に記されている。表紙には「遁花秘訣 全」とある。二ヶ所の頭注があるが、筆跡から見ると後に書き込まれたものと思われるが、いずれも漢字の読みと意味についてである。

構成的に見ると「牝牛痘瘡真仮分別スル法」は「牛痘ヲ種テ発スル諸症」の前でなく、「牛痘奏功証次」の次になっている。元の写本に乱丁があったと思われるが、同じような順序の章立ての写本はない。この意味で長谷川本は特異的であるが、本文全体としては他の写本との間に顕著な差は認められない。図はない。内容はABCDEFGHIILFJKMである。

(16) 富士川本

京都大学図書館富士川文庫に蔵されている。縦二五・三センチメートル、横一七・八センチメートル。袋綴。一

冊、二七丁。毎半丁に無界一二行、一行に約二五字が丁寧に記載されている。書写者や書写年代は不詳。

題箋に「遁花秘訣 魯西亞種痘書」とある。

馬場の「題言」の末尾に「馬場貞由 識」が欠落している。構成的には「魯西亞牛痘全書」と変わらないが、末尾の図は「武田本A」を除けば他の写本よりも図全体が鮮明であるが、ロシア語原書の図とは根本的に異なる。本文中には書き込みや頭注などはない。図の詳細については後述する。内容はACBDEFGHIJKLM図である。

(17) 安井本

愛知県の安井広氏の所蔵本である。縦二四・五センチメートル、横一六・〇メートル。

袋綴、一冊、二四丁。毎半丁に無界一六行。一行の字数は不定であるが、約二四字前後である。題箋に「遁花秘訣 全」とある。一枚目の表に「松本図書」の押印がある。書写者、書写年代については不詳。本文中に漢字の誤りを訂正する頭注が一箇所見られる以外は、特別な書き込みはない。

構成的に一三丁の「乾」と一丁の「坤」に分かれており、「乾」にAからEまで、「坤」にFからM、そして図が収められている。目次は「遁花秘訣標目」となっている。ただし「題言」の最後の馬場の名前が「馬場左十郎貞由」となっている。「左」は「佐」が正しい。末尾に「亜鉛華驅虫散」についての書き込みがあるが、筆跡から見て書写者によると思われる。内容はACBDEFGHIJKLM図である。

以上簡単に各写本について略述したが、構成的に一卷本、二巻本（乾坤、上下、天地）、三巻本（上中下）と三種あり、図のある写本と無い写本などによって様々に分類されよう。現在、馬場の手稿と目される写本は発見されていない。

四. 構成から見た各写本の比較

各写本の構成を理解し易く纏めたのが表3である。

表3 「遁花秘訣」各写本の構成

12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	遁花秘訣原書
武田本	武田本	武田本	武田本	高野本	小室本	国会本	研医学会本	神原本	狩野本	狩野本	魯西亜牛痘全書	...
D	C	B	A						B	A	A	B
...
A	C	A	A	C ₁	A	A	A	A	A	A	A	B
C	I	C	C ₁	A	B	C ₁	C ₁	C	C	C ₁	B	D
B	J	B	C ₂	C ₂	D	B	B	B	B	B	C	E
D	K	D	B	B	E	D	D	D	D	D	D	F
E	L	E	H	D	F	E ₁	E ₁	E	E	E ₁	E	G
G	M	F	I	C ₃	G	C ₂	C ₂	F	G	C ₂	F	H
H	図	G	J	E	H	E ₂	E ₂	G	H	E ₂	G	I
I		H	K	F	I	F	F	H	I	F	H	J
L		I	L	G	J	G	G	I	L	G	I	K
		J	M	H	K	H	H	J		H	J	L
		K	図	C ₄	L	I	I	K		I	K	M
		L	D	I	M ₁	J	J	L		J	L	C
		M	E	J	M ₂	K	K	M		K	M	図
			F	K	図	L	L			L		
			G	L		M	M			M		
				M								
				図								

13	田中本	……	A	C	B	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M
14	函館本	……	A	C	B	D	E	F	G	H	I	J	K	L	
15	長谷川本	……	A	B	D	E	G	H	I	L	F	J	K	M	
16	富士川本	……	A	C	B	D	E	G	F	H	I	J	K	L	図
17	安井本	……	A	C	B	D	E	F	G	H	I	J	K	L	図

ロシア語の原書では当然のことながら馬場貞由の序はない。一目して「狩野本A」、「研医会本」、「国会本」が同一系統に属し、「狩野本B」と「武田本D」が同じ系統に入ることが分かる。「武田本C」は上、中、下巻に分かれた「高野本」の下巻に相当することも明らかである。

この表には記載していないが、写本の中には外題と内題を持つものがある。「神原本」、「武田本B」、「田中本」、「函館本」の四写本で、何れも外題は「遁花秘訣」で、内題は「痘瘡預防法」となっている。ただし「武田本B」では外題が二つ記され、最初は「痘瘡預防法」でその右に「遁花秘訣」とある。いずれも墨で棒線が引かれている。

この外題と内題の存在は、次のような重要なことを示唆していると考えられる。すなわち馬場貞由は松前を去った直後までに一応翻訳を終了したが、書名を原書に忠実に「痘瘡預防法」にしたと思われる。内題に「痘瘡預防法」とあるのはこのことを示唆すると思う。馬場は翻訳が不完全であることを認識していたため訳稿を放置していた。一八一八年（文政元）五月に浦賀に来航したイギリス船の船長ピーター・ゴードンとの会話で牛痘種痘法の話になり、これが切っ掛けとなって馬場は放置していた「痘瘡預防法」の草稿を六年振りに改訂して、新たに題名を「遁花秘訣」としたのである。しかし一部の写本では外題、内題が改められずに「痘瘡預防法」の旧題名が痕跡として遺されたと考えられる。

このことは馬場の序の違いによって明確に指摘することが出来る。「痘瘡預防法」の内題を持たない写本、例えば「狩野本A」では馬場の「序」の最初の方に「予此説ヲ聞テ思ラク方ニ今文明ノ時海外萬國ノ書不求シテ来リ不勞シテ見ルヘシト故ニ其法ヲ記ス書ノ如キモ久カラスシテ必ス来ル事アラン」とあるが、一方「痘瘡預防法」の内題を持つ「武田本B」では「予思フニ遠カララスシテ其法ヲ記シタル書冊舶来アルベシト」と極めて簡単になっており、両者は明確に異なる。馬場が三度の牛痘種痘法との関わりに感激して草稿を六年振りに見直した真情が後者よりも前者によってより良く伝えられると思う。

五. ロシア語原書名のカタカナ表記による各写本の比較

「遁花秘訣」のロシア語原書名は「スポソプ イズバウイツツァ ソウエルシエンノ オト オスペンノイ ザラズイ」である。このロシア語題名を各写本はどのように記しているかを一括して示したのが、表4である。

表4 各写本に見られる原書名のカタカナ表記

遁花秘訣原書	… スポソプ	イズバウイツツァ	ソウエルシエンノ	オト	オスペンノイ	ザラズイ
1 魯西亜牛痘全書	… スポップ	イスバーウ井ツシヤ	ソウエルセンノ	ヲツ	ラスヘンノイ	サラゼ
2 狩野本 A	… スポソツプ	イスハーウ井ツシヤ	ソウエルセンノ	ヲツ	ラスペンノイ	ザラビ
3 狩野本 B	… スポソツフ	イヌハーウ井ツシヤ	ソウエルセンノ	ヲツ	ラスヘンノイ	サライ
4 神原本	… スポソツプ	イズバーウ井ツシヤ	ソウエルセンノ	ヲツ	ラスペンノイ	ザラセ

5	研医学会本	…	スポソツプ	イス	ハーウ井ツシヤ	ソウエルセンノ	ヲツ	ラス	ペンノイ	ザラビ
6	国会本	…	スポソツプ	イス	ハーウ井ツシヤ	ソウエルセンノ	ヲツ	ラス	ペンノイ	ザラビ
7	小室本	…	スポソツプ	イツ	ハーウ井ツシヤ	ソウエルセンノ	ヲツ	ラス	ペンノイ	サラゼ
8	高野本	…	スホソツプ	イス	ハノウ井ツシヤ	ソウエルセンノ	ヲツ	ウス	ペンノイ	サウセ
9	武田本	A	…	スポソツプ	イズ	ハーウ井ツシヤ	ヲツ	ラス	ペンノイ	サラゼ
10	武田本	B	…	スポソツプ	イズ	バーウ井ツシヤ	ヲツ	ラス	ペンノイ	ザラゼ
11	武田本	C	…	欠						
12	武田本	D	…	スポソツプ	イヌ	ハーウ井シヤ	ヲツ	ラス	ペンノイ	サライ
13	田中本	…	スポソツプ	イズ	バーウ井ツシヤ	ソウエルセンノ	ヲツ	ラス	ペンノイ	ザラゼ
14	函館本	…	スポツ	イズ	バーウ井ツシヤ	ソウエルセンノ	ヲツ	ラス	ペンノイ	ザラゼ
15	長谷川本	…	スポメツフ	イス	ハーウ井ツミ	ソウエルセンノ	ヲツ	ラス	ペンノイ	サライ
16	富士川本	…	スポソツプ	イス	ハーウ井ツシヤ	ソウエルセンノ	ヲツ	ラス	ペンノイ	サラゼ
17	安井本	…	スポソツプ	イツ	ハーウ井ツシヤ	ソウエルセンノ	ヲツ	ラス	ペンノイ	サラゼ

注 ロシア語原書名は左記の通りである。医学・博愛委員会編。

Способ изъавляться совершенно от осенной заразы

表の末尾にロシア語原書名を示しておく。各写本で注目すべき点は、「スポソプ」の「プ」が「ブ」か「プ」か、「イズバウイツァ」の第三文字が「バ」か「ハ」か、「オスペンノイ」の「ペ」が「ベ」か「へ」か、最後の「ザラ

ズイ」が何れの写本でも三文字になっているが、ロシア語原書のようにその中に二つの濁音を含むか否かである。「オスペンノイ」の「オ」は写本ではすべて「ヲ」と記されているが、「ラ」は「ラ」と誤記されている写本が八種類ある。しかし両者は書写上区別が付かないことも多い。

第一語の「スポソプ」に近い写本は「狩野本A」、「神原本」、「国会本」、「武田本A」、「武田本B」、「田中本」、「富士川本」、「安井本」である。第二語の「イズバウイツァ」の濁音「ズ」を「ヅ」または「ヅ」と濁音で記しているのは「神原本」、「武田本A」、「武田本B」、「田中本」、「函館本」である。「ヲスペンノイ」を正しく表記しているのは「神原本」、「武田本B」、「田中本」である。前述したように「ヲ」と「ラ」の書き方の問題は微妙で、これだけを取り上げて論ずるのは危険であろう。

以上を考慮すれば、ロシア語原書名を原音に近い形で保存しているのは、全体的に内題に「痘瘡預防法」とあるグループの写本であることが了解されるであろう。

馬場貞由はほぼ原音通りに表記したに違いないから、内題を有するグループの写本がその他のグループの写本よりも馬場による最初の翻訳形態を保っているといえよう。

六、「種痘日々変状之図」による各写本の比較

一六種の写本のうち、「種痘日々変状之図」を有するのは「小室本」、「高野本」、「武田本A」、「武田本C」、「富士川本」、「安井本」の六種である。ロシア語原書の図と併せて、各写本の図の概略を一括して示したのが表5であり、種痘一〇日目の痘瘡を示したのが図1である。ただし「小室本」では一〇日目の痘瘡がないので日付のない手背への接種の図を示しておく。

表 5 「種痘日々変状の図による各写本の比較

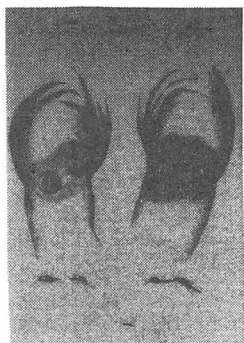
写本 日数	1803年版原書	小室本	高野本	武田本A	武田本C	富士川本	安井本
3	痘瘡×2 側面図なし		3	3	3	3	3
5	〃 側面図×2	右上腕に接種の図	4	5	4	5	4
6	〃 〃		5	6	5	6	5
7	〃 〃	目付記載なし	6	7	6	7	6
9	上腕痘瘡×2 側面図×2	右手手甲 痘瘡×4	7	9	7	9	7
10	〃 〃	右手前腕内側 痘瘡なし	8	10	8	10	8
11	〃 〃		9	11	9	11	9
12	〃 〃		10	12	10	12	10
13	痘瘡×2 側面図×2		11	13	11	13	11
14	〃 〃		12	14	12	14	12
15	〃 〃		13	15	13	15	13
16	〃 〃		14	16	14	16	14
			15		15		15
			16		16		16
	ガラス盤×1 ガラスびん×1			ガラス盤×1 ガラスびん×1	ガラス盤×1 ガラスびん×1	ガラス盤×1 ガラスびん×1	ガラス盤×1 ガラスびん×1

結 論

表5と図1を見て直ちに「武田本A」がロシア原書に最も近く、正確であることが理解されるであろう。原書には種痘五日目から一六日までの痘瘡の正面図と側面図が付されている。「武田本A」は正しくこの側面図を載せ、その数も原書と同じく二個である。他の写本は側面図を欠いており、しかも各日の痘瘡の部位は上腕でなくして、前腕の内側と外側や手背である。従来の研究者はだれもこのことに注目しなかった。つまり「武田本A」の編者は間違いなくロシア語原書を閲覧してその図を模写したに違いないと思われる。そうでなければ、これだけ原書に忠実な図を描くことは不可能であろう。

以上を纏めると次のようになると思う。馬場貞由は一八一三年（文化一〇）松前において村上貞助から「遁花秘訣」のロシア語原書を借りて筆写し、ロシア人モウルの指導を受けて取敢えず翻訳を終えた。そして本文の題名を「痘瘡予防法」とした。こ

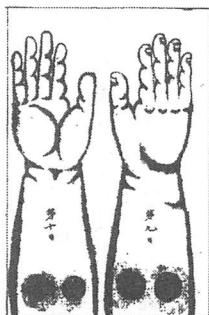
図 1 「遁花秘訣」原書と各写本に現れた種痘後 9～10日の発痘図の比較



1803年刊ペテルブルグ版(9日、10日)



小室本



高野本



武田本A



武田本C



富士川本



安井本

れが第一次草稿であり、現在「痘瘡預防法」の内題を有する「神原本」、「武田本B」、「田中本」、「函館本」の系統である。しかし馬場はロシア語を未だ十分に理解していないと考えたので、この草稿を放置していた。ところが五年後の一八一八年（文政元）イギリス船のゴードン船長との間で牛痘種痘法の話が出たことが切っ掛けとなって、馬場は放置していた草稿を取り出して改めて翻訳を見直した。これが内題を持たない改訂稿である。前記の四写本以外の系統である。この時馬場は「序」も書き改めた。「序」に二系統があるのはこのためであろう。最初に書かれた「序」と「痘瘡預防法」の題を有する草稿が書写され流布して前記の四本となり、書き改められた「序」と改訂草稿が伝写されて前記四本以外の写本が生まれたのであろう。

このことは「遁花秘訣」の中で最も短い節である「どんな時期に痘物質を取るべきか」について、村山七郎訳、「武田本B」、「富士川本」、「武田本A」を比較した表6を見れば了解されるであろう。「武田本B」の誤りが「富士川本」や「武田本A」では訂正され、さらに「武田本A」では丁寧の説明されている。

例えば最初の文章の冒頭「牛痘接種が有名になって以来」は「武田本B」と「富士川本」では「牛痘種法の開ケタル以来」、「牛痘法ノ開ケタル以来」となっているが、「武田本A」では「牛痘種法ノ開ケシヨリ以来」とより正しい日本語になっている。その文の最後「痘物質が未だ透明で水のような時が接種に最適であること、それは普通七日目から一〇日目であることが分かった」が「武田本B」では「発シテ後第六日ヨリ第七日ノ間ヲ良トス」となって数字が二つ共誤っているが、「富士川本」では「凡ソ痘ノ発シテ後第六日ヨリ第十日ノ間ヲ良トス」、「武田本A」では「凡ソ痘ノ発シテ後第六日ヨリ第十日ノ間ニ取ヲ良トス」とある。「富士川本」と「武田本A」では日目の「七」が「六」と誤っているが、「十日」の方は訂正されている。そして「武田本A」では表6に示したように誤解を避けるために、一層丁寧な訳文になっている。

以上のことから、大槻玄幹が校閲した「武田本A」が馬場貞由の訳文から少し離れていると推察されるが、「魯西

亜牛痘全書」と一六種の写本の中では最もロシア語原書に忠実であると理解できよう。

表6 「どんな時期に痘物質をとるべきか」の訳文の比較——村山訳、武田本B、富士川本、武田本A——

村山……牛痘接種が有名になって以来、痘物質が未だ透明で水のような時が接種に最適であること、それは普通7日目から一〇日目であることが分った。

武田本B…牛痘種痘ノ開ケタル以来、他ニ移シテ誤タズ功ヲ奏スルノ候ヲ試ムルニ、発シテ後第六日ヨリ第七日ノ間ヲ良トス。其頃ハ痘粒透明ニシテ、十分ニ水ヲ含ミタリ。此寸ニ其痘汁ヲ取テ他ニ移ス寸ハ、必ス誤ツ事ナシ。

富士川本…牛痘法ノ開ケタル以来、其痘ヲ他ニ種テ誤タズ功ヲ奏スル時ヲ試ルニ、凡ソ痘ノ発シテ後第六日ヨリ第十日ノ間ヲ良トス。其頃ハ痘粒起脹透明ニシテ十分ニ水ヲ含ムモノナリ。此時ニ其汁ヲ取テ他ニ種ル寸ハ、必ス誤ツ事ナシ。

武田本A…牛痘種法ノ開ケシヨリ以来、其痘ヲ他ニ種シテ必ス功ヲ奏スベキハ、発痘幾日ノ痘汁ヲ取ヲテ良候トスルヤ、是ヲ試ムルニ、凡ソ痘ノ発シテ後第六日ヨリ第十日ノ間ニ取ヲ良トス。其頃ハ痘粒能起脹シ透明ニシテ十分ニ水ヲ含ムモノナリ。此時ニ痘汁ヲ取テ他ニ移ストキハ、必ス種ヘ誤ル事ナシ。

村山……老練な医師なら、何日経過したかを尋ねなくても、痘を見ただけで、痘物質を摂るのに何時がよいかを見抜ける。

武田本B…熟練ノ医ハ、第幾日ト日ヲ限ル事ナク、痘ヲ見テ其候ヲ察シ、是ヲ取り用ユ

富士川本…熟練ノ医ハ、第幾日ト日ヲ定ル事ナク、大抵痘状ヲ見テ其候ヲ察シ、是ヲ取り用ルナリ。

武田本A…尤熟煉ノ医ハ、第幾日ト日ヲ定ムル事モナク、大抵痘状ヲ見テ候ヲ察シ、是ヲ取用ルナリ。

村山…もし発疹が可成り大きく、周囲が腫れ上がり、うす赤い色が附近に現われ中央がくぼめば、水泡を刺し他人に接種するための良質の物質が得られる。

武田本B…都テ十分ニ起脹シ、痘ノ縁高ク中凹ク、其辺淡紅色ナル寸ヲ良トスルナリ。

富士川本…都テ十分ニ起脹シ、痘ノ縁高ク凹ク、其近傍淡紅色ヲナス寸ヲ良候トス。

武田本A…凡テ十分ニ起脹シ、痘ノ縁高ク凹ク、其近傍淡紅色ヲナス寸ヲ良候トス。

村山…もしもつと遅く小疹がすでに化膿し始めると、無駄になる。好機を逸したのだ。

武田本B…時後レ、痘既ニ灌膿ノ頃ニ至ル物ハ、用テ功ナク、勞シテ益ナシ。

富士川本…其時後レ、痘既ニ灌膿ノ頃ニ至ル者ハ、用テ功ナク、勞シテ益ナシ。

武田本A…其時後レ、痘既ニ灌膿ノ頃ニ至ルモノハ、用ヒテ功ナク、勞シテ益ナシ。

村山…痘の接種を受けても効果が怪しい。局所的な発作が見られるだけである。この発作は直ぐに経過してしまい、予防目的は達成できない。つまり天然痘の予防ができない。

武田本B…唯其刺シ種タル所ノミ、少シク常ヲ失シテ見ユレ共、是亦忽チ愈ユ。斯ノ如キハ流行ヲ防クニ足ラス。

富士川本…唯其刺シテ種？タル処ノミ、少シク常ヲ失ヒ、忽チ愈ユルナリ。斯ノ如キ寸ハ流行ヲ防グベカラズ。

武田本A…唯其刺テ種タル処ノミ、少シク常ヲ変シテ、忽チ愈ルナリ。斯ノ如キ寸ハ已ニ種ルトイフ共、流行ヲ防クヘカラス。

(注) 漢字の異字体を当用漢字またはカナに改めた。また句読点は松木による。

参考文献

- (1) 小川鼎三『医学の歴史』一四一、一四九頁、中央公論社、東京、一九六四
- (2) 松木明知編『中川五郎治書誌』七九、三四二頁、岩波出版サービスセンター、東京、一九九八
- (3) 平田篤胤「千島の白浪」秋月俊幸 翻刻解説『北方史史料集成』(第五巻)三一七頁、北海道出版企画センター、札幌、一九九四
- (4) 勝俣銓吉郎「語学の逸才馬場佐十郎」『新小説』七月号、八三、九四頁、一九二六
- (5) 伊吹山一草亭「日本最初の露語文典とその著者」『月刊ロシア』八巻一号、六八、七八頁、一九四二
- (6) 伊吹山一草亭「馬場佐十郎の系譜」『書物展望』十三巻、九号、一三六、一三九頁、一九四三
- (7) 杉本つとむ『近代日本語の新研究』一八五、二三四頁、桜風社、東京、一九六七
- (8) 杉本つとむ「蓮花秘訣」とその翻訳(Ⅰ)―わが国最初のロシア書の翻訳―『初原』二号、二四四、二三三頁、一九七二
- (9) 杉本つとむ「蓮花秘訣」とその翻訳―わが国最初のロシア書の翻訳―『武蔵野女子大学紀要』七号、一、十三頁、一九七二
- この中で杉本は香川大学の神原本をも参考に行っている。
- (10) 杉本つとむ『江戸時代蘭語学の成立とその展開―長崎通詞による蘭語の学習とその研究―』八三一、八六六頁、早稲田大学出版部、東京、一九七六
- (11) 杉本つとむ『江戸時代蘭語学の成立とその展開』七一、一〇八頁、四三九、四四三頁、早稲田大学出版部、東京、一九八二
- (12) 杉本つとむ『長崎通詞ものがたり』二三六、二四四頁、創拓社、東京、一九九〇
- (13) 杉本つとむ『江戸の翻訳家たち』一五七、一七一頁、早稲田大学出版部、東京、一九九五

- (14) 文献(4)の一九六頁
- (15) 杉本つとむ『西洋文化受容の諸相』(杉本つとむ著作集九)二〇五、二六二頁、八坂書房、東京、一九九九
- (16) 松木明知「馬場佐十郎訳『魯西亜牛痘全書』の刊行年について」『科学医学資料研究』二七〇号、六、一二二頁、一九九七
- (17) 高橋信吉「再び我国最初の洋式種痘法に就て」『皮膚と泌尿』五卷一号、五三、六〇頁、一九三七
- (18) 阿部龍夫『中川五郎治と種痘伝来』四〇、五〇頁、無風帯社、函館、一九四三
- (19) 村山七郎「日本最初の牛痘法文献の原書」『順天堂医学雑誌』一一卷二号、一〇九、一一六頁、一九六五
- (20) 村山七郎「遁花秘訣」原書の和訳(Ⅰ)『順天堂医学雑誌』一一卷四号、九七、一〇三頁、一九六六
- (21) 村山七郎「遁花秘訣」原書の和訳(Ⅱ)『順天堂医学雑誌』一二卷一号、一〇二、一〇七頁、一九六六
- (22) 小川鼎三、酒井シヅ「遁花秘訣(二種)と魯西亜牛痘全書と村山七郎訳ロシア語原書の内容比較」『日本医史学雑誌』十二卷一号、一一九、一二二頁、一九六八
- (23) 小川鼎三、酒井シヅ 校注 遁花秘訣 日本思想大系 六五 「洋学(下)」岩波書店、東京、三六三、三八三頁、五二
三、五二七頁、一九七二
- (24) 松木明知「中川五郎治の種痘法」『日本医事新報』二二六三号、四三、四四頁、一九六五
- (25) 松木明知「魯西亜牛痘全書」の書誌学的研究(一)『蘭学資料研究会研究報告』二三〇号、一、五頁、一九七〇
- (26) 松木明知「魯西亜牛痘全書」の書誌学的研究(二)——武田本「遁花秘訣」写本Cについて——『蘭学資料研究会研究報告』二三四号、一、一一頁、一九七〇
- (27) 松木明知「魯西亜牛痘全書」の書誌学的研究(三)——狩野本「遁花秘訣」について——『蘭学資料研究会研究報告』二四三号、一九、二五頁、一九七二
- (28) 松木明知「魯西亜牛痘全書」の書誌学的研究(四)——国会本「遁花秘訣」について——『蘭学資料研究会研究報告』二五五号、一、七頁、一九七二
- (29) 文献(2)の九四、九六頁
- (30) 文献(2)の九七、九九頁

- (31) 文献 (2) の一〇〇〜一〇六頁
- (32) 表 4 の注に題名をロシア語で示した。

A Bibliographical Study on Sixteen Extant Manuscripts of “Tonka Hiketsu” translated by Sadayosi Baba

Akitomo MATSUKI, MD, FRCA

Goroji Nakagawa (中川五郎次), a chief keeper of a trading house on Iturup Island, was brought unwillingly to Siberia by Russian vessels in 1807. In 1812, after about five years of hard life in Siberia, he was permitted to return to his homeland with two Russian books on vaccination. Sadayosi Baba (馬場貞由), who stayed at Matsumae in 1813, happened to read one of the two books that had been published in 1803 in Peterburg and he translated it into Japanese. Within several months Baba finished his translation, however, he was clearly aware that the translation was far from perfect. Baba revised his draft in 1820 and titled it “Tonka Hiketu” (遁花秘訣) or “The complete method for relieving small pox infection.” But it remained unpublished until 1850, when Sen-an Tosimitsu (利光仙庵) obtained one of the manuscripts at Nagasaki and published it as “Rosia Gyuto Zensho” (魯西垂牛痘全書, or “A Synopsis of Russian Vaccination.”

At present, sixteen manuscripts of “Tonka Hiketu” are extant in Japan and most of them are in public libraries. Bibliographical considerations of their contents, phonogramic descriptions of the original Russian title, comparisons of their illustrations with the originals and differences among Japanese translations reveal to us that the manuscript “Takeda A,” among sixteen extant manuscripts, is the closest to the original manuscript of Sadayosi Baba, which remains lost